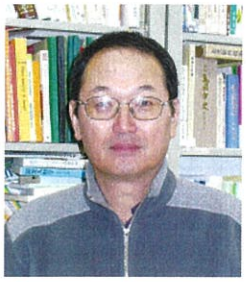
講　演

アジアの中山間地農業から棚田農業と日本の保全活動を考える

京都大学東南アジア研究所准教授　　安藤 和雄 氏



私はプロフィールにも書きましたように、現在専門にやっているのはバングラデシュ、ミャンマー、インド等の農村を歩いて、人々がどんな暮らしをしているのか、農業技術はどのようになっているのか、それらを踏まえてその地域の発展のあり方がどんな風になっているのかを見て研究しています。

私が日本の棚田に関心を抱くようになったのは、目の前におられる中村所長さんや京都府の農林部からの仕事で、私の先生が“都市と農村の交流”のテーマで調査研究を行い、それに１９９０年から参加したことが最初です。京都府の棚田地域を都合６年くらいかけて一緒に回らせていただき、その時の印象が非常に強く、それを契機に日本の中山間地とか棚田問題を考えるようになりました。

私は元々バングラデシュの農業農村を、青年海外協力隊から始めて国際協力事業団の専門家等含め１２年くらい見て回りました。その後就職し、日本の中山間地とバングラデシュの暮らしの違いを痛切に感じ、それをどういう風に考えたらいいのだろうかというところから、今日お話しする事例をレジメにまとめました。

中国の雲南省は、皆さんお聞きになったことがあると思いますが、今アジアで最も広い棚田を有する地域であると思います。雲南省の紅河県は、確か世界遺産に指定されたはずですが、そこへ出向きました。

なぜかというと、日本の中だけで考えているとどうしても10年前の当時、袋小路に落ち入っていました。行き着くところがマイナスのイメージしか抱けなくて、雲南に行ってみようと思うようになったのです。雲南の中山間地の棚田に行けば、何か見えてくるかもしれないと。そこで得たヒントをお見せし、後の総合討論で取り上げていただければと思います。

実は私、雲南に行ったのが４６歳くらいの時で今５６歳ですから１０年くらい前に行ったのですが、フィールドワークということで村の家にホームステイしていました。少数民族のハニ族のところですので、朝から食事のたびに必ずお酒が出まして、そのような状況下、最低でも標高差が５００メートルはある雲南の棚田を下りたり上ったりして調査を進めました。また周辺の村をトラックに揺られて調査に行き来するうちに、自分の心に次のような思いが生じました。

日本の平均年齢は８０，９０歳ですが、中山間地の雲南では私が４６歳で行った時、私のホームステイしていた甲寅村では長老の部類に入るくらいで、お世話になった家でも一番高齢者でした。ふと自分を振り返ってみると、フィールドワークということで村々に行っていましたが、自分は何を伝えたらいいのかと思いました。私は名古屋出身の兼業農家の長男坊で、今でも時々百姓仕事を手伝っていますが、雲南の棚田を見ることによって自省

の念が芽生え、自分は何を伝えることが出来るのか、そういう気持ちを非常に強く持ちました。人間というのは誇りが大事ではないか、誇りを持っていれば何とかうまくいくのではという思いを抱くようになったのです。私がアジア、バングラデシュ、雲南で学んできたことは、村で長年接してきた人たちの顔が非常に味のある、明治22年生まれの私のおじいさんの持っていた雰囲気によく似ている、気骨があって自分の世界を持っている人達が体験や伝承から受け継いだり、自ら編み出された技術や知恵です。

雲南以降インドで調査を進めています。外国での調査の一方で、外国人の方たちに日本の中山間地を積極的に見てもらいたいと思うようになりました。

京都府の仕事をさせていただいて、今日はその御縁でこの丹後にも来ましたが、京都にいて距離的に行きやすい亀岡市と美山町に通い続け、外国から来た私の友人達をいつも連れて行っています。海外の人たちの目から日本の現状を見て、日本の中山間地が海外、特にアジアからどんな風に写るのか、私の考えを踏まえながら紹介したいと思います。二番目に、私の行った雲南の棚田の状況をお話し、三番目に、今私の考えていることを少し述べさせていただきたいと思います。

スライドに行きます。

今日は話のきっかけとして、私がＪＩＣＡのプロジェクトなどでお世話になったバングラデシュの農業大学には農村普及学科がありますが、日本の農学部には、私の知る限り農業普及学科はない、という事を指摘しておきたいと思います。農業の現場に担わる普及の教育において日本は非常に問題があるということです。今ここにおられる京都府の農業関係の方は、ほとんどが農学部出身で普及に携わっておられますよね。私も農学部出身なのですが、農家の人とどう付き合ったらいいのかは大学を出てから手探りで覚え、普及というのは学問的にはきちんとやっていない。バングラデシュは普及学科があり、そこの先生が京都に来られた時、一緒に美山、亀岡に行きました。

これは亀岡の千歳で、出雲大神宮のところです。

亀岡市千歳町耕地整理の入る前

この景観は日本の京都府の棚田ですが、条理が入っていて扇状地になっていて水が湧き出す所に集落を作る。棚田というより、条理的な人工の手が入ったような景観です。今現在どうなっているかというと、ほ場整備事業が実施され、上から見ると棚田が大きな区画に変わり、きれいな棚田は現在ありません。亀岡で注目していたのは畦彼岸花で二種類、３倍体と２倍体があり、ここにあるのは３倍体で、日本の彼岸花は球根で増えて種はできませんが、中国の彼岸花は種ができます。彼岸花は、中国が原産の古代の帰化植物です。弥生時代の頃稲作と一緒に入って来たと言われています。これだけ多くの彼岸花が出来るまでには、何百

年おそらく千年以上の時間をかけて今の彼岸花の群生になった。農家の方も、自分で植えたことはないと言われる。昔は、球根に毒があるが水にさらして毒抜きして食料にしたり、糊の原料などにしたようです。彼岸花の景観は非常に意味があります。生き証人である彼岸花や小さいが石組みなど人間の手が営々として入ってきた証なのです。

条里制によって、小型の農機具が使えました。そのため他の地域が実施しても、ここは基盤整備事業は実施しなかったのです。

これは美山町ですが、茅葺きの里で家屋が残っていて非常にきれいです。

集落の前方の水田は、基盤整備事業が行われて茅葺屋根の家屋がつくられた当時の耕地の面影はありません。

バングラデシュの先生がバングラデシュの農村の景観を見ると、まったくの「自然」であるような印章を誰もが受けます。雨季になると水浸し、乾季には水が引いて苗を植える。そして、土を２～３ｍ高く盛って屋敷地をつくり、そこに木々を植えます。それらは全部人の手が入る空間です。日本よりももっと自然堤防とかがあり、川沿いの高みの立地のいい所に村が出来ています。

日本も人の手が入っている空間です。先生は現在お歳が７０歳くらいの方で、私が勤めている京都大学東南アジア研究所に来られた時は６５歳の時でしたが、「安藤君、亀岡の景観が非常に美しい」と言われるのです。なぜかというと、「バングラデシュも人の手が入っているが、自然の力が非常に大きい。どうしようもないくらいだ」と言われました。

バングラデシュではこれが毎年繰り返される雨季の景観です。

バングラデシュでは自然に逆らう生き方はまず無理です。それでは、暮らしや農業を持続的にできない。とにかく自然と一体化して生きている、究極の自然調和型なのです。皆さんがバングラデシュに行かれたら、間違いなく農村景観から全部が「自然」だと思われる。

バングラデシュの氾濫原の雨季（洪水時）の景観：タンガイル県ドッキンチャムリア村

先生が日本に来て美しいと感じるのは、人の汗と時間の経過が塗り込められたことが明確に表現されている空間にあったのです。

「土地に刻まれた歴史」（古島敏雄著、岩波新書）という日本の農村、耕地美を讃える本があります。今、棚田が美しいと盛んに言われますが、この美しさは日本人だけが感じるものではなく、アジアの人たち皆が、“亀岡的なもの”説明が要らない直感的に誰もが感じる美しさを感じていただけたのだと思います。

私は、昨日一昨日と山口県周防大島に行ってきました。後で写真も出てきますが、ミャンマーの私の友人の先生２人と学生１人を連れて行きました。

そこは、宮本常一という民俗学者が生まれた所で、彼は昭和の初めから３０年くらい日

本のあらゆるところを歩いて回り、そこで得た文化的なものを基本に、地域の発展を考えた人です。

宮本常一は農家の出身で、有名な“離島振興法”は、彼が全国離島振興協議会事務局長をしていた時に作った法律です。彼が素晴らしいのは、単なる民俗学者ではないということです。

近畿日本ツーリストがスポンサーになって、「日本の詩情」という旅のテレビ番組があり、その中で音楽と共に最初に「自然は寂しい、しかし人の手が加わると暖かくなる。それを求めて歩いてみよう」という宮本常一の言葉が映されていたのです。人が入って生活することによって暖かくなる。それが村を作ってきた。農村景観を考える上で重要な見方で、私も全く同感です。

これが宮本常一です。カメラとズタ袋を提げて歩いたそうです。

宮本常一の故里である周防大島というのは、石積みの棚田が非常にきれいな所で、「スイドウ」と言って暗渠とも言いますが、山の谷から引いてきた水を使っています。亀岡でも見たことがありますが、庄地のスイドウが山口県の文化財に指定されています。ミャンマーの人をお連れして庄地のスイドウ付近から、久賀の集落を見ました。瀬戸内のきれいな海沿いの村の空間です。現在は石垣がコンクリートになっている所が水田として使われていますが、昔ながらの石垣の水田にはみかんの木が生えていて、高い所の多くは放棄田、竹やぶになっています。昔は棚田だったのだろうと思いますが、荒れた空間になっていました。

これは美山町の知見集落の山の奥に入ったところの棚田の現状です。今では杉が植えられていて、林となっています。ミャンマーからの訪問者の先生や学生、他のアジアからの訪問者にこういう空間を見せた時どのような反応かというと、皆「残念だ」と言うのです。

これは滋賀県守山です。こういう平坦地なので殆ど放棄田はなく、「美しい」と言います。

当たり前の話ですが、水田の放棄ということを、日本人はもっともっと真剣に考える必要があるのじゃないかと思います。国際的にいくらいいことを言っても、水田が放棄されているのは、いかがなものでしょうか。

美山町と大島、先程の守山などにお連れした外国人の日本のイメージはいいのですが、放棄田を見せて彼らに感想を聞くと、１０人が１０人とも「こういう風にならないように、出来れば開発を考えていきたい」と言います。

いくらいいことを海外に、特にアジアに向かって言ってもだめです。中山間地の水田放棄を何とか止めて行かなければアジアの人々は信用してくれないでしょう。棚田を荒らしてはならないのです。私たちは必ず棚田に戻らざるを得ないのです。アジアの人々と繋がっていく為にもこの事を真剣に考えなければならないと思います。

アジアに向かって物を言う場合に、日本の農村の現状を見せた時、アジアの人は日本人を信じますか？私はこの事に大変危機感を持っています。

ここでアジアの棚田を見ていただきたい。

これは紅河の雲南の棚田です。一枚一枚が、広いのが２メートル小さいのは１メートルのがあって、驚くべきことにここは全部棚田です。ここに立つと非常に大きなショックを

受けます。日本の棚田とは違い、雲南の地形は非常に急峻なＶ字形です。

これが紅河で、なぜ紅河と言うかは雨期に赤土でレンガ色になった川がが流れるからです。

ここでは上の緩傾斜になっている平らな所を棚田にする。横から見るとここは標高１８５０メートル、こちらは標高１５８０メートル。雲南に来ますと、村と耕地はは水平方向ではなく垂直方向に広がっています。この人たちの農地はずっと下にもある。

雲南の農業は、想像以上に非常に重労働です。農作業は歩くしかなく脱穀も籾を背負って歩くしかない。ここでは、朝の８時９時から、午後の３時４時までしか仕事をしない。それ以上やると体力的に参ってしまう。家が切り立ったＶ字の斜面の上にあり、尾根に位置する所に棚田を作って生活しているからです。

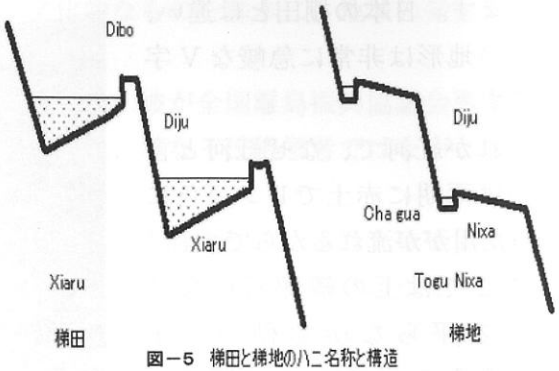
写真－２　尾根に位置する集落

ここがもうひとつのポイントになりますが、今スライドをお見せしたところでは、皆さん多分、ここは棚田なので稲が主食だと思われるでしょうが、そうではない。中国では、高収量品種のハイブリッド米が入る前までは、トウモロコシ米が主食でした。トウモロコシと米を混ぜて炊いたご飯です。日本でいうと麦飯です。トウモロコシ米が主食であったことはあまり知られていません。

アジアの農業を考える時、日本は稲が主食で、少し前まで小農は雑穀や大麦と米を混ぜたご飯が主食を形成していた。何を言いたいかというと、実は棚田は大事ですが、生活を支えてきたものを見ると、ある意味で棚田だけではなく雑穀が大事で、トウモロコシが重要であった事です。トウモロコシが無ければここではかなりの人たちが飢えていたということです。

雲南省の紅河県甲寅郷地方では段畑を梯地、棚田を梯田と言います。中国の棚田は非常に知恵が詰まっていて、黄河の棚田では伝統的に、山側を谷側に比べ５０センチメートル程深くしている。なぜかと言うと水圧を山側にかけて畦が壊れるのを防ぐのだそうです。今どういうことが起こっているかというと、高収量品種は草丈が短いが、こういう水田は小平に１０～２０ｍの深さとなっていて畦に水圧がかかり、非常に畦が崩れやすい。大雨

が降って崩れた所はこの形式の水田でした。棚田と同様にトウモロコシや大豆を植えている段畑も構造上は、山側に水路があり斜面を崩さないという知恵があります。



図－5　梯田と梯地のハニ名称と構造

雲南の棚田の近景です。畦を歩いてみましたが怖いです。日本の畦と全然違い、畦の法面をやっと歩ける幅です。収穫後きれいに平鍬で掃除してあります。そうしないと、雑草は畦を崩すからです。また乾くと畦が崩れるので、冬場は全部の田に水を張ります。非常に理にかなった方法です。１３００ｍの高さの水田では暖かいので二期作が出来ます。刈ったままで放っておいて“ひこばえ”でも穫れるのです。

写真－5　平鍬による梯田の保守作業（畦塗と耕起）

棚田と段畑の作付けパターンは、改良品種ハイブリッドは標高1300メートルの所に３月に植えて、在来種は標高1800～2000メートルの所で４月から９月に栽培する。４月にトウモロコシを植えます。トウモロコシの生育初期は、裸地が多く、雨で表土がどんどん削られる。大豆と混植することによって生育が速く茎の展開により畑の表面をおおうので土壌浸食を守ってくれる。

これは段畑の７月の風景です。ここは６月、７月に雨が降る。よく見てください。トウモロコシ、大豆があります。作業は手仕事、段畑自身も崩れない構造になるよう知恵を働かせてきました。決して棚田だけで生きてきたわけではないのです。色々な知恵があって、畦越し灌漑が行われ、畦塗り作業は全部手仕事です。雨季に行った時、田植え後には日本の農家では水回りが仕事の中心ですが、ここでは一向に水回りに行かない。一定の水位になると、自動的に全部畦越しに水が流れ落ちる。大雨で畦が崩れたと思わない限り田を見に行かない。非常に理にかなったことです。

また、ここでは畦越しで水が棚田に行き渡るので全体が運命共同体というところがあり、今も化学肥料を使っていません。

先ほど雲南の景観を見せました。日本の棚田の延長に雲南の棚田を考えることが出来ます。しかし、バングラデシュの景観には、日本との違いを非常に感じられたと思います。私自身、バングラデシュの農業のことを学生たちに話すと、多くの人は寝てしまいます。それくらいイメージの外にあるのです。日本の棚田、中山間地の農業を是非アジアの中山間地に結びつけて考えてもらいたいのです。

最後にレジメを見てください。

「世界、アジアに開かれた棚田保全の新たな可能性に向けて」というところですが、今の日本の棚田保全というのは棚田だけを切り取って考えられます。

しかし、それは棚田農業の本来の本質からすれば少し外れているのではないでしょうか。そのことを少し問題提起したいと思います。

本当にそんなことで棚田を守っていけるのか、それが一点。

それから、棚田はアジアの原風景ということです。雲南の棚田を見ていただいたように、棚田というのは、おそらく日本の農業の中で一番アジアと結びつきやすいところだという点です。棚田の美しさは色々なことを言われているが、私が雲南で見たのは、美しい景観を作る為の棚田ではなく、棚田が美しいのは本来の農業生産がきっちりと実現しているからです。雲南の棚田には力強さも感じることが出来る。農業生産が美しさの本質であるという事です。我々はこれを忘れて棚田保全をしても、農業基盤として維持していけるのか。今、時代が違ってどういう話になっているのかといえば、食料は国際的な戦略物資となっています。アメリカ、中国は石油・水と、同等の地位を与えている。今後とも重要な戦略物資になるのが目に見えている。戦争経験者の方が何人もおられると思いますが、食糧、農業生産の過不足が戦争の原因になる可能性がある。平和を言うのであれば、是非、自前で食料を作る。自前の食料はというのは、大型機械を使ってだけではなく、単純に生活の中にあった当たり前であるという自覚を村の人も街の人も共有していかなければなりません。

日本では、中山間地で放棄田などの問題で頭を悩ませています。我々は日本の枠内で考えるから、労働力不足や色々な問題を考えていかなくてはいけない。どうしても労働力、賃金のことなど色々な問題がある。余りにも突飛なことかもしれませんが、私は青年海外協力隊として、半分はボランティアで半分は働きに行きました。その体験から、なぜ今、我々が棚田や日本の農村を維持しようとする時にアジアの隣人の力を借りようとしないのか、これが不思議で仕方ない。今、確かに棚田を耕作していくのは大変なことです。そこで１年とか２年とか単位を区切りアジアの隣人にボランティアを呼びかけます。日本の中でボランティアを募集する以上に大きな効果があるのではないかと思います。

そこには賃金、手当ての問題等があると思いますが、今ある日本の棚田を、アジア、世界の食料基盤、もしくは文化基盤として開いていく方向に考えれば、また違った解決方法が見えてくるのではと思います。